

## 2 表現化に視点をあてる

障害児は、相手を意識できない人間ではない。しかし、自分の思ったこと、感じたことを自己表現する能力に欠ける子どもたちの多いことも事実である。なかでも精薄児は一般的に、発達速度も遅く、自己の感性表示を他に伝えることに、非常に困難さがある。本校開設当時の私の記録によると、

小学部低学年の「ひさちゃん」が、私の姿を見ると寄ってきて、小腰をかがめながら、私の顔を見上げるようにして「コーチョ」「コーチョ」と数度くり返した。私は校長でないので戸惑った。しばらくしてから顔をさげ「ハイ」と答えてやると、にっこりして立ち去った。こんなことが何回かあった。

数日たって、この話を担任のI教諭に話すと、『先生、彼女は最近、もの（言葉）を言おう、言おうとしました。それは、「コンニチハ」と言っているのです』とのことだった。なんとも彼女の全身で訴えようとする懸命な自己表現を読みとれなかった自分のふがいなさに恥いった。

マーテンスは、精薄児教育の目的は、「自己表現と自己統制である。」とさえ言っている。この情報過多の時代に生きる障害児たちが、人として生きるために、それは素朴かもしれないが、相手の心にせまり、通ずるような「表現」ができるようにしていくための指導が必要であることを痛感した。表現とは伝達することであるとするなら、他に認められるような表現化こそ重要であり、またその表現化の過程を育てていくことが大切である。そのためには、表現に必要な基礎的な能力や技術を習得させることに重点をおいた指導内容が必要であるという観点から、本校の研究主題を「表現化」を育てるという点に重点をおくという意味で「視点をあてる」ことを課題とした。すなわち、自己表現が社会的に認められるようになる力を、児童生徒の障害や彼等の持つそれぞれの特性と個性を生かしながら育ててこそ、社会参加ができ、自立の道も開けていくものであるという意味から、今回の研究テーマの柱が建てられたのである。